

## 咳喘息—種々の側面からの検討—

新潟県立加茂病院

藤森勝也、江部佑輔

新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学

塚田弘樹、下条文武

新潟大学医歯学総合病院医科総合診療部

鈴木栄一

【背景】新潟県の2592例の気管支喘息症例中、アレルギー性鼻炎合併は855例、約33%にみられた。一方、気管支喘息と胃食道逆流の関係は以前より指摘されている。

【目的】咳喘息において、鼻汁中好酸球の有無、胃食道逆流症の合併頻度を検討する。

【対象と方法】胸部X線写真正常の3週間以上続く乾性咳嗽で、咳喘息と診断した症例を対象にした。鼻汁中好酸球の有無、鼻汁と鼻閉症状、QUEST問診票を検討した。鼻汁中好酸球は、Hansel stainを用いて、各視野に数個以上見られる場合を陽性とした。

【結果】咳喘息11例で検討した。男3例、女8例、年齢 $60 \pm 16$ 歳。鼻汁中好酸球陽性は4例、36%。詳しく問診すると、2例が軽度の鼻閉を伴い、1例が軽度の鼻汁を伴っていたが、いずれも主訴は持続する咳嗽であった。一方QUEST問診票で4点以上は、4例、36%にみられた。いずれの症例も内視鏡で逆流性食道炎を認めた。ラベプラゾール(商品名;バリエット)を併用し咳嗽は改善した。この4例中3例のカプサイシン咳感受性は $4.88 \mu\text{M}$ と亢進しており、1例は $39.1 \mu\text{M}$ であった。

【まとめ】咳喘息では、上気道である鼻粘膜に好酸球が見られる症例がある。しかし、鼻症状は咳嗽に比べごく軽度であった。また胃食道逆流症を伴う症例がみられる。咳喘息で咳感受性が亢進している症例がみられるが、その理由の1つに胃食道逆流症の合併があるのかもしれない。